ヘタ鬼―Another storys―

宮原　司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヘタ鬼―Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙｓ―

【Ｎコード】
Ｎ１５９６Ｚ

【作者名】
宮原　司

【あらすじ】
始めはただの噂話だった。

世界会議場から三時間程歩いた所にその屋敷あった。
そこには化け物が出ると言う噂があった。
入ったら出会う灰色の化け物。
追いかけられる国達。
それは、一種の鬼ごっこの様なものだった。

逃げるのは国。追うのは鬼。
さあ、命懸けの鬼ごっこを始めようか。
ほとんどシリアス。たまにある笑いは♪と表記。

０１：始まりはここからだった　（前書き）

初めに

これはヘタ鬼の小説です。

思いっきり模造が入ってます。

そして作者のアレンジが入ってます。

台詞も変わってる所があります（まだ一度しか見てないのでお許しを）。

結構残酷表現があります。

残念クオリティー。

つまりは駄文です。

それでも良い方は←にスクロールして下さい。

01：始まりはここからだった

本当に。本当にそんなつもりじゃなかったんだ。ただ皆でわいわいやろう、仲良くなろうと思っただけ。楽しく皆で騒ごうとそんな軽い気持ちでアメリカに話した……。なのに。なのにこんな事になるなんて……。

《初めてこの屋敷に入った時の事は息も出来ないくらい、鮮明に覚えている》

屋敷に入ってすぐに現れた謎の灰色の化物（おに）。何故屋敷にこんな物がいるのか、そんな事を考える間もなかった。一番後ろにいた中国が扉を開けようとしたが扉は無慈悲にも開かない。それが分かった瞬間、皆化物の攻撃を躱（かわ）しながらバラバラの方向に逃げた。誰が何処へ逃げたかは覚えていない。ただただ化物は刻一刻と俺に近づいて来る。このままじゃ、逃げ切れない。俺も自慢して言い訳じゃない逃げ足で逃げ切る事に成功した、そう思っていた。まさか、まさかそれが俺を逃がす為に化物の間に入った日本のお蔭だ何て、俺は知るはずもなかった。

俺が咄嗟に逃げ込んだのは暖炉のある鍵つきの部屋だった。暖炉に火はなく、肌に触れる部屋の空気はひんやりと冷たい。何となく鍵をかけいいない後ろが恐くなり、鍵を閉める。扉を叩いたのがもし一緒に来たメンバーであれば何かしら声をあげる筈だ。しばらくその部屋で待った。でも……、誰の声もしない。恐る恐る部屋の鍵を開ける。確か逃げ込んだ時にドイツが入った部屋を目指す。それは階段から出て左手にある扉。ゴクリと唾を飲み、ドアノブに手をかける。そして周りを見回すと一気に扉を開ける。そこには……、

「ドイツ、プロイセン！」

見知った二人の青年が息を整えていた。二人共あの化物から逃げ切ってそう時間は経っていないらしい。扉を後ろ手で閉めると息を整える二人の側に座った。

「……二人共、あの化物、見たよね？」

「あ、ああ……」

まだ二人共顔色は青かった。イタリアだってあんな生き物は生まれて始めて見る。そして……、恐かった。年の功なのだろうか、プロイセンが先に息を整えて持っていた剣を軽く手入れする。

「ヴェスト。敵が何時来てもいいようにお前も準備しとけ」

無言で頷くドイツも愛用の使い込まれた鞭を磨く。自分はどうしよ

う。持っているのは常に白旗と小型の救急箱持ち運んでいるだけだ。これだけではあの化物が襲って来ても闘い様がない。事実、イタリアの使える術技は補助や回復に限られていたのだから。見れば二人共傷は小さいが怪我をしていた。一瞬自分の白旗を見つめて、布を一思いに引きちぎる。

「イ、イタリアちゃん！？」

「イタリア！？」

二人の驚きの声があがるが、有無を言わせずにドイツとプロイセンの怪我の部分に丁寧に巻いていく。自分に出来る事はほとんど無いに等しいのだから。その時だった。ガチャガチャとドアノブが激しい音をたてて回った。プロイセンとドイツが揃って目でイタリアに合図する。合図を受け取ったイタリアも二人の邪魔にならない程度に後ろに下がる。剣と鞭を構える二人。そして扉が開くと……、

「何だ君達、ここに居たのかい！？」

声の主はアメリカだった。彼の後ろから中国、イギリス、フランス、ロシア、カナダが部屋へと入って来る。皆一様に怪我をしているが、誰一人として重症の者は居なかった。

「お前らも無事だったか……」

ほっと一息ついて剣を下ろすプロイセン。だがその目は油断なく今は閉ざされた扉を見ていた。

「何とか、ね……。ってイタリアも無事だったか」

良かった良かった、とグシャグシャに頭を撫でるフランス。彼もまたあの灰色の化物と戦ったのだろうか、二の腕を包む服にうっすら血が滲んでいた。

「フランス兄ちゃん。よかったら俺、腕、手当てするよ？」

頭をよしよしと撫でていた手が不自然に一瞬止まった。が、

「なぁに。お兄さんはまだまだ大丈夫よ。それより自称紳士とカナダを手当てしてやってくれる？」

「自称言うな！！」

フランスの発言にキレたイギリスを避けて先にカナダの手当てをする。

「す、すみません……」

確かにフランスの言う通り二人の怪我は皆より酷かった。カナダの手当てが終わり、恐る恐るイギリスに近づく。すると、

「……そんなにびくびくしなくても俺は何もしねぇよ」

不機嫌そうに言われた。別にイギリスに怯えていたのではない。正確にはその怪我の酷さに、だ。

「ったく……。どっかの誰かさんを庇うんじゃなかったぜ」

小声で愚痴を言う。そして、誰にも言うなよ？と釘をさされた。捲って出された足は少しえぐれていた。あの化物にこれで済んだのな

ら良かった方なのかもしれない。びりびりと破いた白旗の布を器用に足に巻いて、術で止血する。これで全員の怪我の手当ては修了した。

――――――――――――

「ねぇ、これから僕らどうしようか」

ポツリとロシアの呟いた言葉が部屋中に響く。皆交代で扉の見張りをしているがまだ気は抜けなかった。

「……やっぱりさ、何人かに別れて屋敷を探索しよう」

そうアメリカが言った。だがそれはいい案であると同時に危険な賭けでもあった。別れてしまえば必然的に襲われる危険は高まるからだ。すると、ずっと黙っていた中国が、

「美国（アメリカ）にしては珍しく正論言ったある。確かにここに何時までも居ても何の解決にもならねぇある」

真っ先に賛成する中国。次々と賛同していく皆。普段なら反対するフランスでさえ、

「ホント、こればかっかりは仕方ないねぇ……」

ぶつぶつ言いながらもズボンの埃を払い、立ち上がる。

「イタリアは……、どうする？」

俺達が何処か安全な部屋を見つけるからそこで待ってるかい？、遠慮がちなアメリカの声。それはきっと自分が恐がりで戦う手段を持たないからだろう。それでも、それでも答えは決まっている。

「俺も手伝うよ」

責任は始めに誘った俺にあるのだから。

――――――――――――

一階にはまだあの化物が居る可能性がある。二階の部屋はほとんどアメリカ達が調べたらしい。残るは上の階だけ。イタリアが少しだけ扉を開いて確認するが廊下には人一人いない。皆警戒を怠らずにそろりと廊下に出て、すぐ側にある階段を昇る。ここでメンバーは別れる事にした。上に続く階をアメリカ、カナダ、中国、イギリスが。三階をドイツ、プロイセン、ロシア、フランス、イタリア。三階の二つの部屋の内、出前のドアノブに手をかけたその時だった。ガチャガチャとけたたましい音をたてながら奥の扉が開く。そこに居たのは、見たくなかった灰色の化物。その瞬間、ドイツの顔が強張る。そして、

「イタリア！お前はそこの部屋を調べろ！それまでに俺達はコイツを倒しておく！」

ドイツが鞭を構え、プロイセンが下段に剣を下げる。ロシアが怪しげな水道管を持ち、フランスが不得手なレイピアの柄に手をかける。

「Ｖａ　ｂｅｎｅ！！」

思いきって扉を開けて中に入る。すると、戦時中に嫌と言う程嗅いだあの鉄の様な臭いがした。嫌だ、これ以上先には行きたくない。でも誰かが怪我をしているならば手当てをしないと……。葛藤を乗り越えて部屋の奥へ踏み出したイタリアが見たのは……、

「日本？」

血まみれでピアノに寄りかかる日本の姿だった。

――――――――――――

突然目の前にぶちまけられた光景に俺は目を疑った。が、遠くからでも分かるくらいぐっしょりと血で濡れた日本の黒い髪。真っ白な軍服は真っ赤に染まり、彼が寄りかかっているピアノも赤一色で染め上げられていた。真っ白だったであろう床には、大きな血だまりが出来ている。傷は酷く、息は浅い。

「ホントに、日本なの？」

日本が居る……。そうだ、俺達は１０人でこの屋敷に来たんだ。何

故。何故忘れていたのだろう。俺は思考が徐々に戻って来たのを感じ、そして、

「日本！」

ここでようやくこれが現実である事を理解した。駆け寄って流れ出る血を止めようと傷口を手で塞ぐが血は一向に止まる勢いを見せない。俺が体に触れた事に気づいたのだろうか。日本がゆっくりと顔を上げた。

「無事で良かった、イタリア君。こんな爺でも囮になれて良かったです……」

大量の血を失い、土気色になった顔で優しく微笑する日本に一瞬俺の頭は何を言われたか理解する事が出来なかった。今日本は何て言った？囮？もしかして、あの時俺が化物から逃げ切れたのは……、日本が囮として惹き付けてくれたから？それを全て理解した瞬間、叫びたくなった。

「どうやら私は、ここまでの様です……」

――――――――――――

日本と最後に何を話したかは鮮明に覚えている。だけれども、未だにイタリアは信じられなかった。国である筈の日本が死んだ何て。力なく床に落ちた手には彼の愛用した刀が握られていた。彼の最後

の言葉は何だったろうか。確か、

『最後までご一緒出来なくて、本当にすみません』

途中まで言いかけて最後は口の形だけで伝えてくれた。イタリアがなけなしの治療道具で手当てをしようとしたら、私より他の方に使って欲しい、と。土気色の顔をした彼の何処にあれだけの力があったのだろうか。彼は自分が死ぬまでその手を離さなかった。まるで、自分が死ぬ事を悟っていたかの様に。

「日本……」

日本が死んだ、そう肌で感じてしまった瞬間に涙は止まってしまった。俺は悲しくて、悲しくて仕方がないと言うのに。涙は出なかった。そして、

「じゃあね、日本」

手についた日本の血を拭い、足取りの重い中、ゆっくりと廊下へと続く扉を開けた。

02：消える命

《ひとり、またひとりと》

暖炉のある鍵つきの部屋。そのカーペットの上にロシア、フランス、中国の三人が横たえられている。まだ意識ははっきりしているが何処まで持つかはイタリアには分からなかった。

「おらイタリア。行け。ここに居たら、また化物が出るぞ」

息も絶え絶えなのに明るく言ってみせるフランス。先程までは元気にイギリスと冗談を言っていたのに。だが今は力なく体を床に横たえて話すだけでも辛そうだった。日本が欠けてから情報を出し会う為に集まり、地下室の鍵と書斎の鍵を見つける事に成功した。二つの部屋を見る為にまた二手に別れたのだ。イタリアはロシア、フランス、中国の三人と書斎に行き、あの化物と出くわした。先程戦ったよりも化物は強く、素早い。フランス、イタリアの術もむなしく、前衛二人はぼろぼろだった。そこに偶々地下室の状況を伝えに来たプロイセンが入り、闘いは一旦こちらが有利になった様に見えた。だが、化物の急に早く、鋭くなった一撃を喰らったロシアは動けなくなり、中国もそれに巻き込まれて戦闘不能。最終的には三人（イタリアは補助）で何とか化物を倒しきったのだ。が、フランスまで重症を負った。何とかアメリカ達が来る前にと暖炉のある鍵つきの部屋に運んで今に至る。

「プロイセン……。イタリアの事、任せたぜ？」

「……ああ」

絞り出す様に声を出していたフランスがふっと泣きじゃくるイタリアに笑って見せる。そして、

『最後まで一緒に行けなくてごめんな、イタリア。お前は頑張れよ？』

そう口が動き、深く息を吐いた。

「兄ちゃん？」

彼は、二度と返事を返してくれなかった。

「伊太利（イタリア）。お前も早く行くよろし。お前がここに居たって何の意味もないある」

中国もイタリアの術でも癒しきれない程の切り傷を負っているのにそんな事を言う。

「ホントに、君はとろくさいね。……僕達の頑張り、ムダにしないでよ？」

一見悪口を言っている様にも聞こえるが、これは不器用な二人の精一杯の激励。ずっと黙っていたプロイセンが行くぞ、と肩を叩いた。プロイセンに続いてイタリアも扉の所まで行く。閉めるの直前に二人を見ると、

『最後まで一緒に行けなくてすまねぇある（ごめんね？）』

そう口が動いたのをイタリアは見た。名残惜しげに閉めた扉の奥が沈黙に満たされたのはそれから数分後になる。

――――――――――――――――

《命を落としていったんだ》

「……うん。だから君は先に行っていいんだぞ」

必ず追い付くからと言うアメリカの体には袈裟懸けの裂傷が。彼が寄りかかるベットにはイギリス、一つ向こう側にはカナダが横たわっていた。二人とも、ついさっきの襲われた化物との戦闘で命を落としたばかり。化物の振り返りざまの攻撃を避ける事が出来なかったイタリアを庇ってアメリカまで動けなくなった。たぶんここから動かせばアメリカの命をもっと早く縮める事になる。だからイタリアは彼をここからドイツの居る部屋に連れて行く事が出来なかった。

「何で、何で庇ったの？そのせいでアメリカが……」

ぼろぼろと涙が流れる。

「確かに俺はさっきの攻撃で動けなくなったさ。だから……、ここに残るよ」

「そんな……」

「いや、違うな。彼らにはもう聞こえないから言うけど……、俺が側に居たいんだ」

アメリカはベットに横たわる二人を普段なら見る事の出来ないくらい優しい目で見ていた。そうだ。確か二人はアメリカの……、

「大事なんだよ、二人とも」

大事な家族なんだ。どんなに納得出来なくても、それならばイタリアに彼を引き止める事は出来ないだろう。

「だから居たいんだ。俺の最後まで」

「……アメリカ」

『最後まで一緒に行けないけど、ここから幸運を祈ってるよ。あの二人だって死に際にそう言ってた』

――――――――――――

《俺は、何の役にもたたなくて……。馬鹿みたいに皆に守ってもら

ってた》

ようやく部屋に戻って来た二人を見て、自らの犯した罪の大きさにイタリアは泣き叫んだ。

「どうして……。少し様子を見てくるだけって言ったのに！！」

支えあいながら血まみれの二人が力なく床に座り込む。

「それは、お前が皆が死んだ事を黙っていた事と同じだ」

「！？どうしてそれを……」

二人は皆が死んだ事をとっくに気づいていたのだ。そして、こんなにぼろぼろなのに、イタリアを見て笑う。それを見るのが、辛かった。

「ほら、入口の鍵だ。これで出られるぞ」

喜べと血にまみれた鍵をイタリアの手の中に落とす。真鍮で作られた鍵は二人の血を被っても鈍く光続けていた。

「そうだぜ、イタリアちゃん……」

折れて辛い筈の腕でイタリアの頭を撫でるプロイセン。違う。違うよ。俺、本当は二人が化物に奪われた鍵を取りに行ったんじゃないかって途中で気づいてた。なのに、

「俺達はここで少し休んでから行く。だからお前は先に行け」
もう我慢出来なかった。これ以上皆を犠牲にして生き残る何て俺に出来る筈もない。
「やだ！俺もここに残る！ドイツ達をここに置いていける筈ないよ！！」
どんなに怒鳴られても、殴られても、訓練が厳しくても、それでもいいから。俺は二人と居たかった。
「言う事を……聞かない……奴はグランド１０周……だな」
「ほら、イタリアちゃん。早くしないと……もっと増えるぜ？」
優しく、同時に残酷な事を言う二人。
「良いよ。俺、何周でも、何百周でも走るよ！だから……」
一緒に……、そこまでいいかけた時、パタンとプロイセンの腕が床に落ちた。
「プロイセン？」
続いてドイツも。
「ドイツ？」
二人は俺のせいで死んだと言うのに、日本と同じ様に、皆と同じ様に笑っていた。皆、皆、俺のせいで死んでしまった……。

―――――――――――

どれくらいドイツ達を見つめていただろうか。跳んだ思考が徐々に戻ると同時にどう表していいか分からない感情が生まれる。現実を受け止めろ、頭がそう命令しても感情が追い付かない。のろのろと顔を上げた先にタンスが見えた。とにかく皆が死んだ事が信じられなくて、それを当てる様にタンスを壊す。下の階に降りる度に目についた物を壊していく。そして、台所に来た。坦々とまた壊す作業をしようと近くにあった皿を床に投げつける。その時、欠片が当たったのだろうか。指先が少し切れていた。傷口から血が少しだけ盛り上がる。

「……痛いよ、ドイツ、日本」

これが何時もだったら、

『全く……。鍛え方が足りんぞ、イタリア！！』

『ドイツさん、それは少し違うと思いますよ。ああ、ほらほらイタリア君泣かないで下さい。今絆創膏を出しますね』

何気なく心配してくれたのだ。アメリカ達だったら、

『全く、君はドジだなぁ……』

『アメリカ君が言える事じゃないかな～』

まずアメリカとロシアはバチバチと火花を散らし始めるだろう。

『何やってるあるかお前は……。有難い薬塗ってやるから手を出すよろし』

『ホントねぇ……。イタリア、次は気を付けるんだよ？』

中国がぶつぶつと言いながら薬を塗って手当てしてくれて、フランスが釘をさす様に注意する。

『ワイン髭に言われたら終わりだな』

『何だって！良いの？お兄さん、本気だしちゃうよ！？』

『二人共止めて下さいよ～！！』

喧嘩をする二人の間にカナダが入るのだ。全部失われた。あの灰色の化物によって。ふらふらと当てもなく階段を昇り、適当な部屋に入る。そこは……、図書館だった。どうせ見たって頭に入る筈がないのに適当な本に手を伸ばす。名前は『竜頭の孤』。何だろうと開こうとしたその時だった。バタンッと扉の開く音がしてあの灰色の化物が部屋に入って来た。

「う……、うわぁっ！！」

恐怖からか足が勝手に出口へと動き出す。とにかくあの化物から逃げないと……。その一心で足を動かす。階段へとたどり着き、急いで駆け降りる。そして開く筈のない扉まで必死に走り、そのドアノブを捻る。ドイツから貰った鍵が胸ポケットの中から消えると同時

に、入った当時は固く閉ざされていた扉が開いた。

０３：契約、そして巻き戻る時

吹き荒れる風とその風に乗り、叩きつける様に降る雨。薄暗く、辺りを見渡せば屋敷の門が見えた。

「出られた……？」

あれだけ固く閉ざされていた扉が開いた何て信じられなかった。１、２歩歩き出して屋敷を振り返る。そこにはこの屋敷に来た時と変わらない姿が。ただ一つ違うのはこの屋敷を一緒に眺めた仲間がいない事。

「何だよ……。皆を、皆を屋敷に置いて、行ける筈がないじゃないか」

抱えたままだった本を強く握り、再びドアノブに手を掛けようとする。それと同時にガチャガチャ！、ドアノブが一回転。もう１、２歩下がったイタリアの前に現れたのはわざわざ外まで追って来たのだろうか。灰色の化物が立っていた。恐怖がイタリアの足を突き動かす。ズシンズシンと音をたてて迫って来る化物に、

「止まれよ！！」

もう、あと一歩で門から出られると言う所で止まって制止をかける。ここから出てしまえば化物は追って来れない、何故かそう確信を持つ事が出来た。

「ここを越えれば俺は屋敷から出られる。そうしたらここにはもう人は来ない。だって俺と言う国が生き残ったんだから。だから……、お前の負けだよ」

化物は今にも門をくぐろうとするイタリアをじっと、ただ見つめ続ける。

「ねぇ、何かそれって悔しくない？こんな足だけ取り柄の奴に負けて」

先程の行き場のない感情が瞬時にこの灰色の化物への怒りに変換される。日本を、ドイツを、そして皆を殺したコイツを絶対に許さない。

「……戻せよ。こんな歪んだ空間だったら戻せるだろ？そうしたらお前、一番に俺の事を食べにくれば？勿論、お前が俺の足に敵えばの話だけどね」

両手を広げてさあと促す。我ながら馬鹿な、狂った事を言うものだと思う。でも……、それでも皆を取り戻したかった。

「戻せよ！！！！」

強い口調で怒鳴る様に言う。それに反応する様に灰色の化物がおおおおおおおお……と鳴き声をあげる。その瞬間、イタリアの持つ本が眩い光を放った。

―――――――――――

「……でさ、皆でその屋敷に行ってみないかい？」

化物と本によって時は屋敷に行く前の時間に巻き戻された。隣には屋敷に入った当初に死んだ日本と少し前に死んだドイツが。生きてる……、皆、皆生きてる。それだけで涙が出そうになった。真っ白なピアノ、真っ白なカーペット、真っ白なベット、真っ白な床。ここは全てが赤に染まった世界ではない。

「ん？どうかしたのかイタリア。涙何か浮かべて？」

不思議そうにドイツが覗き込む。

「何か目に入りましたか？」

そっとハンカチを差し出してくれる日本。ドイツと日本の優しく、気遣った問いかけ。あの世界ではもうとっくの昔に失われていたもの。それが今はここにある。腕に抱えた日記を悲壮な決意と共に強く掴む。絶対に全員救ってみせる……。

この時のイタリアはこれからの時間を巻き戻し続ける悲劇の未来をまだ知らなかった。その悲劇への悲しみは二人の人間へと流れる事になる。一人は己の半身（ロマーノ）。もう一人は一昔前に失われた国。時代を

を越えてその声（メッセージ）は彼の人へと届く。そして今日もイタリアの巻き返しの日々は続く。

そして、そんな彼（イタリア）に仲間の救いの手が差し出されるのはもっと後の世界になる。

０３：契約、そして巻き戻る時（後書き）

はい。宮原です。

今回はニコニコ動画で見たヘタ鬼を書かせていただきました。

宮原は物凄く（年単位で）流行遅れな人なのでヘタ鬼はつい最近まで全く知りませんでした。

掲示板とかツイッターで感動すると聞いて始めて見てみるか、となったくらいです。

ヘタ鬼ファンの方々、実にすみません、はい。

そして所々模造及び変わっている所がちらほら（たぶん）あると思います。

何しろ一回しか見てないので……とか言い訳してみます。

その辺りは題名にあるＡｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ（もう一つの物語）としてお楽しみいただけたら幸いです。

前は１話として投稿しましたが携帯で読んでいたらしい知り合いに長くて読みにくいと不評だったため分割しました。

さあ、宮原の長い後書きもここまでです。

長々とお付き合いいただきありがとうございました。

こんな脱出は認めない！！　１　♪

安全なドケシ城で皆席に着き、それぞれ好きな料理を食べていた時の事だった。突然フランスが話があるから聞いて欲しいと言い出した。

「俺さぁ、考えたんだけどイギリスのスコーンであの化物って倒せるんじゃない？」

『……』

一理ある。皆そう思ったからかじっとイギリスを見つめた。当事者のイギリスとしては何だか複雑な気分。これは褒められているのか、褒められていないのか。どちらにしろ、フランスの言う事はむかつく。

「良いね！化物全部に食べさせて天国に行って貰って、鍵を楽々取って屋敷から出るんだぞ！！」

今日だけは君にＨＥＲＯの座を譲るぞ☆と言われても全然嬉しくない（↑悪意はない）。が、イタリアが少し喜色の色を見せたので抗議を止める。

「と、とにかくやってみましょうか」

――――――――――――

急遽(きゅうきょ)大量に作られた暗黒物質(スコーン)の山。見るだけで虚しくなるイギリスの心中を他所に、化物探しは続く。

「トニー（？）！早く出てくるんだぞ！」

アメリカが仮の名前で敵を呼び続ける。普通敵が呼ばれて出てくる訳がない。出てきたら出てきたであの顔はホラーだ。一体……、どうしてこうなったんだ！！

「え～と、美味しい暗黒物質(スコーン)があるよ？そうだ。次いでにぼこぼこりん♪……」

水道管を持ったままにこやか（黒い笑み）に笑う彼は化物より恐い。がしかし、

「……」

化物は出てきてしまった。

「何でこんな事で出るあるか！？」

我達(わたし)の苦労はなんあるか！と化物に特攻をかまそうとする中国をフランスとイタリア、そして日本で押さえる。彼の怒りは分からなくもないが今は暗黒物質(スコーン)を投げつけるの先だ。アメリカがピッチャーの様に振りかぶる間に、ロシア、スペイン、プロイセンが惹き付ける。これはもう結束注意報が発令されてもいいくらいだ。

「喰らえ、俺達の最終兵器(リサーサルウェイポン)を！！」

「てめぇ……、屋敷から出たら覚えてろよ！」

化物目掛けて飛ぶ暗黒物質(スコーン)。何の警戒もしていないのかそのまま飲み込んでしまう。

「どうなのかな？」

数秒後……、見事にひっくり返った。

「え？マジで？マジで暗黒物質(スコーン)で倒せるの？」

お兄さん、懐に幾つか入れておこう、とフランスを始めに皆して複雑な顔をしながら暗黒物質(スコーン)を手に取る。

「あ、あの……皆さん。この化物、おかしくないですか？」

存在感が消えかかっているカナダが声を振り絞って言う。何処がだ？と化物の顔を覗き込んだプロイセン。次の瞬間、

「けせせせ！！こりゃ、傑作だ！」

俺様ブログに載せたいくらいだぜ！と高笑いする。そうプロイセンが言うので皆、恐る恐る覗き込む。そして……、

「何だいこれ！」

「どうしたら生える……」

「兄ちゃん、俺は大丈夫？生えてないかな？」

「大丈夫だろ」

化物の顔にはそれはそれは見事な眉毛が生えていた。

こんな脱出は認めない！！　１　♪（後書き）

……後輩からのリクエストです。

曰く、「他のゲームでイギリスのスコーンは最終兵器らしいから先輩、やってください！」

と熱いリクエストの結果、こうなりました。

なんだ、これ……。

０４：親友（イタリア）の死

カタカタと階段を昇る複数の足音が聞こえる。そんな中、ドイツはただ呆然と、友人（イタリア）が息を引き取った部屋の前で立ち尽くしていた。心にぽっかりと穴が空いた様な感覚が抜けない。兄（プロイセン）から立ち直れ、現実を受け止めろ！と殴られた痛みですら上手く認知出来ていない。イタリアが死んだ、それだけが重く、ドイツの心を圧迫している。それを頭では理解していても思考はそれを否定する。本当は分かっている。イタリアは自分達を守って死んだ事ぐらい。入口で必死に自分達を引き止め様としたあの姿が浮かぶ。もう止めよう、俺が悪かったから！と泣き叫ぶイタリア。彼はこの屋敷がどう言う所か知っていた、そう死に際に言った。本当は2回目なんだと。前の世界では自分は何の役にもたたなくて皆に守られていた。だから、だから今度は俺が皆を守りたかった、取り戻したかったんだよ。死に際だと言うのに、痛くて辛いと言うのに、ごめんねと最後に笑った。握っていた手が床に落ちた時、もうどうして良いか分からなかった。しかしこのままでは駄目だろう。とにかく兄達と合流しなければ……、そう顔を上げた時だった。先の廊下にイタリアの姿が見えた。必死に追いかけて、戻ろう、そう我ながら情けなく言った自分をイタリアは叱って殴った。あのイタリアが、だ。

「俺の知ってるドイツはこんなに弱々しくない！」

思いを全て吐き出す様に、叫ぶ様に、イタリアは自分に訴え続ける。そして気づいた。イタリアは死んだんだと。彼は何時までもくよくよし続ける自分を叱咤しているのだと。彼（イタリア）はもう生きていない。そ

れを理解してしまうのが辛くなかったと言えば嘘になる。だがここで立ち直らなければ、幽霊になってまで思いを伝えに来たイタリアに申し訳がたたない。

「じゃあな」

最後に交わす言葉は何気なく、飾り気もない別れの挨拶。

「大丈夫。俺はちゃんと戻れるよ」

悲しそうに微笑むその姿を心に刻み付け、一思いに扉を閉めた。もうその扉をドイツが開ける事はなかった。

05：巻き戻る世界

彼(ドイツ)が立ち直るまでの間、イギリスはイタリアの名が記された日記を読んでいた。そこには、自分の知らない事実が記されていると踏んだからだったのだが……。書いてある内容は悲惨だった。一言で表すならただの記録帳。『1回目』と無造作に書かれたその下には誰が何処で、どんな経緯で、どの様に死んだかが詳細に記されていたのだ。正直笑えなかった。イタリアが入口で必死に止めようとしていた理由がようやく理解出来た気がする。彼は一度体験していたのだ。だからこそ一番始めの日本を守ろうとした。イギリスの中でイタリアの言っていた言葉のパーツが繋がる。パタン、扉が開く。ようやくドイツが何とか振り切った様な表情で戻ってきた。それは喜ばしい事なのだが皆、イタリアの死への困惑。それと同時に国がこの屋敷では死ぬ事を思い知っていた。今しかこの魔術を使う機会はないかもしれない。当然高い代償はつくがそれでも、今なら何の説明の無しに魔術を行使出来る筈だ。静かに魔力を日記へと集める。すると、ふと顔を上げたアメリカが俺の手を掴んだ。

「イギリス。君、何する気だい？」

集まる魔力を敏感に感じ取ったのかもしれない。だが、ここで止める訳にはいかない。

「お前には関係ねぇよ」

言い捨ててもアメリカは食いついて来る筈だ。

「あるさ！君の変な力を使う時と感覚が似てる。しかもただじゃ済まない規模だろ？」

昔から隣で魔術を使う俺を見ていたのだから。

「僕もアメリカ君と同じかな。確かにそう感じ……っ！？」

魔力が叩きつけられる様に部屋の中を吹き荒れた。

「なら教えてやるさ。時間を……、戻す」

「そんな事が……」

出来る筈がない、そう日本は言いたかったに違いない。だがイギリスは魔術師。時間を巻き戻すくらいなら多少無理をすれば出来ない事はないのだ。ただし、

「対価は記憶と……俺の命だ」

『！？』

皆の顔が驚愕に染まる。時間が巻き戻れば、もう何も覚えていない筈だ。止めようとするアメリカを突き飛ばして魔術を起動する。淡い燐光が屋敷を包み、大地を揺さぶる様な衝撃が辺りを襲った。

06：隣のHERO

時間は巻き戻った。記憶は対価として捧げたから皆俺がどうなるかは知らない。探索を続けていると、入口でイタリアが泣き叫ぶ声が聞こえて来た。今ならそれに含まれた意味が分かる。イタリア達が入口から去った後、カツン……。ブーツに何かが当たる。『竜頭の弧』。確かイタリアが持っていた日記だ。何故ここにあるのだろうとページを捲る。だがそれは過去にイギリスが見たものとはかけ離れていた。数百ページにも及ぶ巻き戻しの記録。つまりこれは未来の記録なのだ。これこそ何故こんな所にあるのだろうか……。反射的に壊れたままの時計を見る。そろそろイタリアが三階に来る時間だ。覚悟を決めなくてはいけない。一段、また一段と踏みしめる様に階段を昇り、イタリアの姿を探す。

「イ、イギリス！？何でここに……」

それこそこっちの台詞だった。狙われている人間が一人でふらふら歩く何てどうかしている。驚いているイタリアを無理矢理図書館まで引っ張って、

「いいか、よく聞け、イタリア。とにかく二階には行くな」

「え？」

「いいから。お前が死ぬまで後少ししかないんだ」

つまりそれは自分(おれ)の命の終わり。何とかイタリアにそれだけを伝えないと命をかけて時間を巻き戻した意味がない。

「え、ちょっとイギリス。よく分からないんだけど……」

「とにかく！二階には行くなよ！！」

首を傾げたイタリアを無理矢理部屋から追い出す。そろそろ時間切(タイムリミット)れだ。時間と共に図書館の向こう側の入口に灰色の化物が現れる。出来るだけ時間稼ぎをする、そのつもりでイギリスは化物に向かった。

――――――――――――

息が荒い。肩から流れ落ちる血も限度を知らないのか、床に滴り続ける。その血をわざとらしく化物に向けて撒き、他の階へ行かせない様に惹き付け続けた。だが、それもそう長く続ける事は出来ない。イギリスが逃げられる範囲は三階に限られているのだから。急いでイタリアが近づかせなかったピアノの部屋に入る。そこには先客が居た。イタリア、ドイツ、アメリカと言う先客が。だが皆気配が違う。時代の違うイタリアの日記がこの世界にある。つまりそれは……、未来から来た奴らが居るからだ。

「お前らの目的は何だ？」

肩から滴り落ちる血を見て顔を真っ青にし、拳を握りしめる弟(アメリカ)。国の彼らなら自分がもう助からないと分かる筈だ。

「……日記を、探している」

「ドイツ！？」

日記がないから元の世界に帰ろうにも帰れなかったと言う事か。懐にしまっていた日記を投げ渡す。それと同時に化物が部屋に入って来る。

「イギリス！」

思わず声を上げる弟（アメリカ）を片手で制すと、魔術を起動させる。発動時間は約一分。それだけ稼げれば問題ない。なけなしの魔力を練り上げ、防御魔術、そして、

「お前ら何て、なけなしの魔力で強制送還してやる……」

その空いた隙に攻撃を加えようとした化物を拘束で縛り付ける。姿が少しずつ消えていく未来の世界の弟（アメリカ）はずっと自分の名前を叫び続けていた。

「頼む……。絶ちきってやってくれ……」

それが彼らに聞こえたと同時に彼らの世界に強制送還される。その時だった。ガチャガチャと扉が開き、呑気な声でアメリカが入って来る。辺りを見回して傷だらけの自分と化物を見ると、化物を警戒しながら支えてくれた。

「ここは後３０秒で爆発する。お前は、逃げろ……」

その目が迷った様に揺らいだ。そして、

「付き合うよ」

しっかりと自分を支え直す。その目には微塵の迷いもない。数秒後、部屋を爆音が包んだ。

０６：隣のＨＥＲＯ（後書き）

結構うろ覚えのところが多いです。

07：変わりつつある世界

ああ。何で俺、またこの屋敷に来ているんだろう。もう二度と行きたくなかった筈なのに……。過去数十回に行った妨害工作で屋敷にいかないと言う選択肢がない事に気づいた。それからは前回の失敗を踏まえて、そこをフォローしていくだけ。今回一緒に来たのは日本、フランス、中国、ロシア。まさかの一番始め組。日本からは絶対に目を離さず、次の三人も絶対二階に近づけさせない。確実に安全だと言える所に彼らを誘導する。それぐらいしか出来ない自分が悔しいがそれでも少しずつ良い方向へと変わりつつある。

「イタリア君。二階の部屋は結構閉まっているみたいですし、もう集合場所に行きましょうか」

ドアノブをひねって扉が開かない事を確認した日本が振り返る。彼はここ数回の世界で生存組に入っている。だからなおさら気は抜けなかった。

「イタリア、了解であります！」

びしっと何時もの様に反対の敬礼をして見せる。敬礼、反対ですよ、とクスクス笑う日本。こんな時でも警戒を怠ってはいけない。失われたら、時間を戻すまで戻ってこないのだから。しかも運が悪い事

に今回は前衛型が二人しか居なかった。この状態で戦闘になる事だけは絶対に避けたい。せめてドイツ達が来るまではあの化物(おに)と遭遇した、その程度で済ませておかないと数で勝っていてもこちらが危ない。

「おーい二人共。お兄さん達も上、手伝おうか？」

階段を上がって来たのはフランスだった。後ろに続いて中国、ロシアが続く。どうやら五人全員が二階に揃ってしまった様だ。しかしこれは運が良かったかもしれない。下手をすれば時間のズレの関係で合流出来ない可能性だって充分あったのだから。

「今終わったよ～。フランス兄ちゃん達の方はどうだった？」

上がって来た彼らが怪我をしていないかざっと見て確認する。怪我はしていない。まだ灰色の化物と遭遇していない様だ。その事に内心ほっとする。

「まぁ、収穫はあったよ。中国が寝室の鍵を見つけたんだ」

寝室。過去の経験上誰かが隠れて（高い確率でプロイセン）いた場所だ。序盤こそは危険じゃないが後半になると上からの不意討ちに気をつけなければいけない。

「そうある。感謝するよろし」

中国の声を聞きながら日記をめくる。確か今までの世界ではこのメンバーの時で寝室を訪れた時に化物が出たと言う記録はない。が、それは皆が集まってからの話。これは序盤メンバーなのだ。これは充分警戒しておく必要がある。

「さっすが中国！」

言葉では賛美を述べても頭では別の事を考える。これが出来る様になったのはつい数回前の世界の話だ。

「うふふ……。そのまま僕の家（うち）に来てくれたらもっと良いなぁ」

にこにこと言うロシア。絶対、冗談になってない。

「ど、どさくさに紛れて何を言ってるあるか！んなのあり得ねぇある！」

日本に目で助けろと訴えた中国。フランスは我関せずと目を背けた。

「え、ええと……。ロシアさんは冗談がとてもお上手ですね」

苦笑いと共に言われた一言は、

「え～？僕、冗談のつもりはなかったんだけどなぁ～！！」

一瞬で切り捨てられる。そう言うロシアからガシッ！と肩を捕まれた。何故だろうか、心なしか体の温度が下がっていく気がする。

「ウ、ヴェ～！？日本～！！」

素直にロシアの手から逃れて日本を盾に隠れる。

「そんなに恐がらなくてもいいじゃない～！」

またにこにこと笑うロシア。面白がっているのか、面白がってないのかよく判断出来ない。ただ、あの灰色の化物よりもロシアが恐ろしいと始めて思ったイタリアだった。

０７：変わりつつある世界（後書き）

ここからが完全に創作。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1596z/

ヘタ鬼―Another storys―

2011年12月31日16時52分発行